

ニッポンバラタナゴのオス (産卵場所である二枚貝の様子をうかがっている)

# 佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

1 August 1993

No. 101



## 常設展案内

## 平成4年度 博物館新収藏品展

会期：5月14日(金)～7月4日(日)

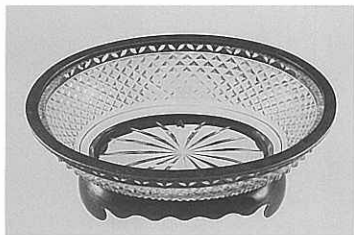
博物館では、前の年度に購入、寄贈、寄託によって収蔵した主な資料を一堂に展示する「新収藏品展」を行ってきた。今年で4回目を迎え、春から夏にかけての催しとして恒例行事となった感がある。

今回の「平成4年度新収藏品展」は、博物館の3号展示室を使って自然、考古、歴史、美術、民俗の各分野から55件の作品、資料を展示した。展示品の主なものは、自然の分野では照葉樹林（なかでもインド北部、ネパール、中国四川省）に生息するチョウ類111種の標本、考古では諸富町石塚1号墳出土の古墳時代の鉄製器である「桂甲」、歴史では近世の肥前佐賀を代表する刀工八代忠吉の刀と脇差、肥前鐙20件、佐嘉城のものとなえられる欄間、美術では江戸切子と佐賀硝子、江戸後期の佐賀の画家周幽齋夏龍による肉筆浮世絵美人画「雪松文書き美人図」、日本赤十字社の前進である博愛社を創立したことなどで有名な本県出身の佐野常民の書ほか8件、民俗では県内で二例しか確認されていない山内町黒髪神社寄託「四季耕作図絵馬」など充実した内容であった。

広辞苑を引けば、博物館とは「古今東西にわたって考古学資料・美術品・歴史的遺物その他の学術的資料を広く蒐集保管し、これを組織的に陳列して公衆に展示する施設」と記述されている。つまり、博物館の収集資料というものは、過去か



雪松文書き美人図 周幽齋夏龍



江戸切子

ら現代にいたる時代の、様々な地域に属する、研究対象となる多様な資料ということになる。今回の展示内容は、「東西」とはいわず「佐賀の」という冠詞のつく資料がほとんどであったとはいえ、ある程度広さをもった多彩な品々であった点、博物館本来の醍醐味を体現していたのではなかったらうか。

また、一般に博物館資料は、一部の例外を除き何らかのかたちで歴史をになっているという意味では、全て歴史的なものである。しかしながら、単なる歴史資料というものはなく当然他の側面を有しているように、資料は複合的な価値を持ったものであるといえる。したがって、解明し尽くされた資料というものは希で、どの資料も少なからず未知なる要素を残しているし、一方その未解明などがある意味では想像力をかきたてる魅力ともなっている。すなわち、資料をこのような奥の深さを秘めた魅惑的なものとして眺めてもらえるか否かが、博物館の展示において最も肝要なことではないかと考えている。

ともかく、「新収藏品展」は「組織的に陳列」する場ではなく、いわばお披露目展示であるとはいえ、収集資料を初めて広く批評にさらすわけであり、観覧者の目にどのように映るのか試される、学芸員にとっては試練の展示でもある。

(学芸員 福井尚寿)

## 常設展案内

## 平成4年度 美術館新収蔵品展

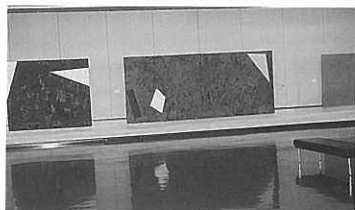
会期：3月30日(火)～4月25日(日)

佐賀県立美術館が前年度に収集した作品は、近代から現代にいたる絵画や工芸のさまざまなジャンルにわたっています。とくに、日本の近代美術の誕生期に活躍した百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助を生んだ佐賀県では、近代絵画の収集に力を入れてきたほか、郷土出身の画家や工芸家たちに焦点をあてて、美術や工芸をつうじて佐賀県を知ろうと努力を続けています。

なかでも、ヨーロッパの古典主義に学び日本の近代洋画にロマン的な新風を吹きこんだ画家岡田三郎助(1869～1939)は、明治から大正、昭和の日本洋画壇の重鎮、第1回文化勲章の受章者として有名です。今日、絵画ファンをひきつけてやまないのはあでやかな婦人像ではないでしょうか。工芸品、とくに染織に造詣の深かった画家は、桃山時代に一世を風靡(ふうび)した「辻か花裂(つじがはなざれ)」や江戸時代の小袖(こそで)類を収集してはモデルにまよわせ、重厚な布、時に軽やかな衣のなかから匂うような肌とつややかな表情をひきだしています。

新収蔵の作品は「ローマの古橋」(1930)と題した油彩(キャンバスボード)風景画の小品ですが、絹地に岩絵具で描いたテラコッタのような色調の「フローレンス風景」(館蔵、1930)とならべて見たい一点です。デッサンの「裸婦」(1936)とあわせて、今秋開催される美術館開館十周年記念展「日本近代洋画の栄華—岡田三郎助—」であらためて紹介されるでしょう。(会期：10月8日～11月14日)

岡田の対極にあるのは古川吉重(ふるかわよししげ：1921～)の絵画でしょう。(写真は展示風景)60年代末から80年代の作品「無題」、「L-57」、「L5-8」は、現代を象徴する抽象画です。アンデパンダン展に始まり、1963年以後ニューヨークを活動の場としてきた画家で、その回顧展が国内では初めて福岡市美術館(「在ニューヨーク30年の軌跡—古川吉重展」)と大阪府の国立国際美術館(「近作展II 古川吉重」)で開催されました。



吉重の生まれは福岡市ですが、曾祖父にあたる鍋島藩士古川松根(ふるかわまつね、1813～71)は、鍋島直正公(なべしまなおまさ、1813～71)に仕え国文学、絵画、和歌などに優れた才能を発揮し、藩主の没後殉死した人物です。このため、博物館では近世絵画や和歌をしたためた書などの松根作品、美術館では吉重の絵画をそれぞれ収蔵し、展示しているのです。

工芸では、鍛金(たんきん)家石田英一(いしだえいいち、1876～1960)の作品を展示しています。東京美術学校から東京芸術大学にいたる半世紀あまりを金工科で鍛金という地味な技術を指導し、日展の第四部(工芸部門)設立運動に加わり、創作活動を続けた作家です。石田家からご寄贈いただいた作品、とくに、大正14年(1925)バリ万国装飾美術工芸博覧会に出品された「鍛金三宝燭台(鐘起蠟燭台)」にご注目ください。日本的な漆器の鼓の胴を大胆にも金属で再構成した意欲あふれる大作(高さ54.0cmあまり)です。

ほかには、高本背水、北島浅一、吉田西縉、井手誠一、吉武研司の洋画、牧野宗則の版画、松尾忠次の金工、小川泰彦の染色があり、前年の企画展「鍋島鍛通—もめんの華—」のために収集したり、ご寄贈を受けた鍋島鍛通、堺鍛通、赤穂鍛通も展示しました。

(学芸員 宮原香苗)

## 常設展案内

## 城内に生息する淡水魚

## 1. 生きた生き物を展示する

「先生、ウナギって魚ですか。」「ミジンコが目で見るとですか。」9年間の教職生活において、このような生徒にたびたび出会ってきた。自然が豊かと言われるこの佐賀県においても、自然の中での実体験に乏しい子供達が年々着実に増えつつあるのである。

4月から県立博物館に勤務させていただくことになり、地方の博物館として子供達にもっと身近な生き物に興味を持たせるには何をすればよいかを考えた結果、思い付いたのが当博物館の周辺(佐賀市城内)のお堀や河川に生息する淡水魚を、生きた状態で展示することであった。魚は日本人になじみが深い、色が美しく一般の人に受け入れられやすい、水辺環境を考えるきっかけになるなど、自然に対する興味を高めるのに多くの長所がある。佐賀でハヤと呼ばれている魚にも実際には数種類が存在する。ちなみにハヤという名前は地方名であり、このような標準和名(図鑑に記載される正式な名前)は存在しない。おそらく十分な調査を行えば、城内のお堀や河川には20種類以上の淡水魚が生息しているであろう。

ところで、生き物をできるだけ自然状態に近い状態で生かしたまま展示することは、近年世界的に流行しつつあり、自然と人間の共存が叫ばれている中、今後ますます一般化してくるのではないだろうか。城内という身近なところに生息している淡水魚を対象にした理由もこの点にある。

## 2. 城内に生息する淡水魚の紹介

4月29日(みどりの日)に捕獲調査を行ったが、この日だけでコイを除き18種類の淡水魚を捕獲することができた。この18種類を5つの水槽に分けてそれぞれの種類について解説を付け、5月4日から展示を始めた。場所は博物館1階のロビーから美術館へ通じる通路である。この展示は常設展の一部なので、今後も継続して展示する予定である。

## (1)ニッポンバラタナゴ(コイ科)



体長4~5cmまで。あまり流れの無い水域を好み、城内のお堀には多産している。春~初夏にかけての産卵シーズンには、オスの体色が朱色や金属光沢のある緑色に彩られる(これを婚姻色という)ことからこの名前が付いた。なお、人為的に日本に移入され本種と亜種関係にあるタイリクバラタナゴが、各地で日本在来のニッポンバラタナゴと交雑し、純粋なニッポンバラタナゴはほとんど見られなくなりつつある。このためニッポンバラタナゴは環境庁から絶滅危惧種に指定されている。佐賀県内ですべてに鹿児島市などでは、明らかにタイリクバラタナゴと認められる個体が発見されるが、お堀の個体は外見的特徴を見る限りにおいてはニッポンバラタナゴと考えられる。

## (2)カゼトゲタナゴ



体長3~4cmまで。全国でも九州北部から中部の佐賀、福岡、大分、熊本の四県にのみ分布するが、地元ではあまり知られていない。どの地方でも個体数が少ないと言われるが、佐賀平野東部の

中小の河川は多産地である。オスの婚姻色は華麗で、すっきりした色合いと体側の濃いブルーの線、赤いアラインと口紅が愛らしい。

### (3)カマツカ (コイ科)



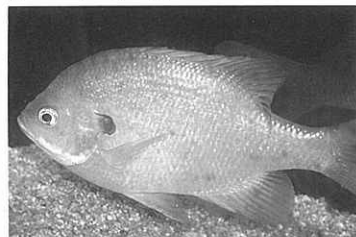
コイ科の底生魚。砂地を好み、お堀よりも多布施川に多い。驚くと砂の中にもぐるので、スナモグリと言う地方名が全国にある。白身でなかなかの美味である。

### (4)オイカワ (コイ科)



いわゆるハヤ釣りの対象魚。しかし、図鑑に記載される標準和名はオイカワという。河川改修による単調な環境にも強い。

### (5)ブルーギル (バス科)



ブルーギルという名前からわかるように、本種は日本在来の魚ではなく、北アメリカ原産の外来魚である。日本には1960年に移入され、その後全国各地に人為的に放流された。しかし、本種はエ

ビなどのほかに魚の卵や稚魚を食べるために、各地で在来魚の生存を脅かしている。お堀のブルーギルも明らかに人為的に持ち込まれたものと考えられるが、外来種の侵入は生態系に大きな影響を与えることがあるので、安易な放流は慎むべきである。なお、本種はフライやムニエルにすると美味なので、捕まえた人は積極的に食べるようにしましょう。

これらの他に、コイ科のゼゼラ、カワムツ、アブラボテ、ヤリタナゴ、カネヒラ、ムギツク、ツチフキ、カワヒガイ、イトモロコ、モツゴ、ゲンゴロウブナ、メダカ科のメダカ、ハゼ科のドンコの生息が確認された。

### 3. 展示に対する反応

今回の淡水魚の展示は、特に子供達に身近な生き物を知ってもらうのが目的の一つであった。ところが魚を見た子供達の多くは、一様に「あっ、熱帯魚がいる。」と口にするのである。これに対し、30代以上の方々は懐かしそうに水槽の中を覗いては、「まだ、こがん魚のおとねえ。」「新聞についていたので、ドンコを見ました。」と好意的な反応を示す方が多かった。この反応の差は、子供の頃の遊びの内容が大きく影響していると考えられる。また、中には「たったこれだけですか。」と、厳しいことを言われるお客さんもおられた。しかし、これはこのような趣向の展示に対する期待の表れと言えよう。

生き物を生かして展示するのは、その管理上において何かと問題点も多い。水槽の中を泳ぐ魚に過剰な反応(?)を示す子供もあり、ニッポンバラタナゴはストレスのため一時期病氣療養中であった。しかし一方で、生きた物からしか得られないことがあるのも事実である。佐賀県は自然が豊かな県と言われながら、そのうちのほんの一部しか知られていない。今回の城内の淡水魚の展示をきっかけに、魚以外の分野でもそこに行けば佐賀県の自然を見ることができるといって地元志向型の展示を心がけたいと考えている。

(主事 中原正登)

## 研究ノート

## 佐賀藩絵師広波雪山(下)

## 作例

本誌99号では、記録の面から広波雪山を論じたが、本稿では作品について述べることにする。広波雪山の作品として伝えられるものは次の通りである。

## (1)金山寺・西湖図屏風 6曲1双

鍋島報效会/佐賀県立博物館蔵

- |                |      |          |
|----------------|------|----------|
| (2)山水図(行体)     | 1幅   | 個人蔵      |
| (3)山水図         | 1幅   | 鍋島報效会蔵   |
| (4)山水図         | 1幅   | 佐賀県立博物館蔵 |
| (5)山水図(草体)     | 1幅   | 個人蔵      |
| (6)山水図         | 2幅   | 松井文庫蔵    |
| (7)山水図屏風       | 2曲1隻 | 東京芸大蔵    |
| (8)夏景山水図       | 1幅   | 個人蔵      |
| (9)達磨図         | 1幅   | 個人蔵      |
| (10)白衣観音図(大燈贊) | 1幅   | 個人蔵      |
| (11)竹に雀図       | 1幅   | 個人蔵      |
| (12)屏風下絵(未表装)  | 1巻   | 個人蔵      |

作品はすべて紙本墨画で、(1)と(4)に一部淡彩と金泥が施されている。

(12)屏風下絵は、無款ながら画風等から雪山の筆になると考えられるものであり、計11種類(うち1図は2扇分のみ断巻)の6曲屏風の下絵で、前半に2双分の花鳥図、後半は山水図となっている。

ほかに「古画備考」には、「紙三幅対、草山水、雲谷風あり」「徑山図、紙襖物」「布袋塔墨立賛附紙」の記述がみられる。また、近年の売り立てから「踊り布袋図」「文殊騎獅像」などの存在も知られる。

題材としては、山水図が最も多く人物、花鳥がそれに次ぐ。

## 画風

まずは、作例の多い山水図によって画風をみていくことにする。8点の山水図の作例のうち真体は(1)のみ、行体は(2)~(4)、草体は(5)~(8)と各画体を器用にこなしている。

まず真体の金山寺・西湖図屏風は、屏風絵とし

て確認される唯一の大作である。時代は下がるが等竺(1741—1803)筆西湖図屏風(山口県立美術館)、あるいは等龍(誕1804—1875)筆金山寺図屏風などの雲谷派の画家の作品と図様が一致し、描法も謹厳な雲谷派のものである。また、この二つの中国の景勝地の組合せは雲谷派の等徴(1767—1851)の作品が知られ、さらに人物の目鼻が省略されている点も、上記雲谷派画家のものと一致している。

[雲谷派の作例については山口県立美術館「雲谷派の系譜—雪舟の後継者たち—」(1986年)を参照]

また、屏風下絵のいずれの図も雲谷派の影響は明かである。この下絵には「寛永十六年極月廿三日ニ京極様へ上ル屏風之地取也」との書き込みがあるため、1639(寛永16)年頃の佐賀本藩絵師となる以前の武雄時代のものと考えられる。雪山の御用絵師としての任務の一端も知られると同時に、



金山寺図屏風(金山寺・西湖図屏風のうち) 佐賀県立博物館制作時期を特定できる資料として重要である。屏風下絵の描かれた1639年頃の雲谷派は、雲谷派の祖等願の長男等屋の早逝により同派を継いだ次男等益(1591—1644)の時代であるが、下絵のなかには等益の作例と図様の似る山水図も含まれている。また、金山寺・西湖図屏風もそうであるが、等益ほどの描線の強さはないものの屈曲する樹木や岩の描法に等益の作品との類似点指摘でき、その描法の習熟度からすれば、等益に直接師した可能性も十分考えられるように思われる。

行体、草体による山水図からも金山寺・西湖図屏風ほど明瞭ではないが、雲谷派の要素は見取することができる。松井文庫本の峻厳な澄墨山水は例外として、そのほかの作品は雲谷派の特色だけではない他の要素を加味し、謹厳さを減じた穏やか

な表現となっている。時代性もあるだろうが、恐らく当時佐賀本藩の他の絵師達が狩野派の画家であったこと、あるいは一族の画家心海が狩野派に学んだこともあって、狩野派的な描法を吸収して、このような穏やかな折衷的な描法を確立していったのではないだろうか。

そのうち、(2)山水図(本誌99号表紙)の箱蓋に「山水 寛文拾八月吉日 広渡雪山筆」と銘文がある。制作年と断定できないものの、もし1670(寛文10)年頃の晩年に近い時期の制作と見なせば、屏風下絵や金山寺・西湖図屏風のような雲谷派の影響の濃い時期から、描法を変化させていったように推測することも可能であろう。

人物では、達磨図からも顔貌に雲谷派の影響を看取できる。一方、本図は肥瘦のある衣皺線が流麗な美しさを醸し出した個性的な作品であり、『素川本図絵宝鑑逸文』にいう「木花折枝」と共に達磨を得意としたとする記述を裏付けるものともいえる。また、署名を欠き印章のみの落款形態は、金山寺・西湖図屏風と同様のものであるところから近い時期、つまり比較的初期の制作とも考えられる。

白衣観音図は、軽快な水墨技法による作品であり、ここでも雪山の水墨画家としての優れた素質が窺える。着賛者の大燈なる人物は、禪僧であるように考えられるが不明である。

花鳥図では、作品としては略筆体の竹に雀図のみで、作風を論じるのは難しい。屏風下絵に2双分の花鳥図があり、これは雲谷派の描法による本格的な作品の下絵であり、初期の雲谷派にも作例



屏風下絵第4図

第3図



屏風下絵第11図

第5図

が少ない屏風形式の花鳥画大作の図様として重要なものといえる。

### 落款

落款の形式は、(1)と(10)では署名をせず、それ以外はすべて「雪山筆」と記している。書体はいずれも大差ないもので、署名のある作品に時間的な大きな隔たりがあるようには思えない。



達磨図

印章は、確認していないものもあるがこれまでのところ5種類ある。初期の作品と覚しき金山寺・西湖図屏風や達磨図には、「広渡」白文鼎印と「雪山」朱文重郭方印が押されている。この「広渡」白文鼎印には別種の類似する印章があり、そのいずれも、署名を伴い「山」の字が山の形をした「雪山」白文長方印と一緒に押されており、作品の制作時期の前後関係の一つの目安といえるかも知れない。

### おわりに

以上、雪山研究の現状報告を二回に分けて行った。記録の面では、雪山の出た広渡家が16世紀から17世紀にかけて、中世以来武雄を領していた後藤氏から、龍造寺氏、鍋島氏とその支配者が交代する時期に当り、雪山の父の代から絵師の役割を勤めながら彼らに仕えた家柄であったことが確認できた。

また、山水図を中心とした作品から確認される雪山の作画期間は寛永期以降であり、初期には雲谷派の影響の濃い作品を描き、狩野派的な描法を吸収し徐々に画風を変化させていったという大まかな図式を想定した。不明な点を多く残したままであるが、新たな資料の出現を期待しながらとあえず筆を置く。

(学芸員 福井尚寿)

## 御 挨拶

館長 飯盛 邦尚

私事で恐縮ですが、県に奉職以来、教育行政に携わるのは今回で3度目になります。最初は、私立学校に関する業務、二回目は図書館長としてでありました。

御承知のように、博物館・美術館は、図書館と同様に、社会教育施設であります。図書館在任中は「生涯教育」、「生涯学習」という教育の流れが具体的に動きだした頃でした。そして、3年後の今日では、その施策が着実に進捗しつつあるようです。

公立の博物館・美術館は、地域の人々の生涯学習を支援するうえで、きわめて大きな役割を持っているものと思います。すなわち、これらの施設は地域に密着した自然、歴史、芸術などに関する、各種の資料を収集し、保管し、展示に工夫を凝らしているのです。その地域の実像を学ぶことができ

るところであるからです。

これらの資料を通して、自分の住んでいるところ、育ったところを再認識することにより、故郷に対する愛着が生じ、誇りを持つことが出来るものと考えます。そのことは、



「まちおこし」の大きな原動力となるでしょうし、学校教育との連携を深めることにより、自ら学ぶ場としても役立つものと思います。公立博物館の活動は、県政の基本目標である「住みたい県日本一」の実現に大いに寄与するものと確信しております。

博物館・美術館は、このような重大な使命を持っておりますが、現状は、まだまだ多くの課題を抱えております。県民の皆様のご支援を頂きながら、職員一同とともに使命達成のため、微力を注ぎたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

## 日誌

4月1日付、人事異動で下記のとおり職員員の異動がありました。

## 転 入

館長 飯盛 邦尚 (人事委員会事務局長より)  
副館長 森 醇一朗 (文化課参事より)  
総務課主査 東島 幸子 (佐城教育事務所主査より)  
技術員 近藤 誠性 (神埼保健所技術員より)  
学芸課主事 中原 正登 (白石高校教諭より)

## 昇 任

学芸課 資料係長 蒲原 宏行 (同課主査より)

## 転 出

館長 武藤佐久二 (保健環境部次長へ)  
副館長 小宮 睦之 (退職)  
総務課主査 古賀 恭子 (佐城教育事務所主査へ)  
技術員 戸川 内匠 (退職)  
学芸課 資料係長 宮崎 武夫 (塩田工業高校教諭へ)

後記 当館報も101号となり、B5からA4に判型を変更、表紙をはじめ内容を一新しました。  
発行は、年4回・季刊の予定です。

佐賀県立博物館・美術館報 第101号

平成5年8月1日

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840 佐賀市内1-15-23 ☎0952・24・3947 ☎0952・25・7006

印刷 (株)日之出印刷